

主な登場人物（年齢は作中に記載）

朝本涼香―高校生

佐倉美月―涼香の叔母

今里絹江―駄菓子屋店主

秋村朋美―高校生

松永莉緒―高校生

宗次誠臣―高校生

そのほか

○総合病院の診察室

椅子に座っている少女、朝本涼香（10）、その隣に立っている涼香の叔母、佐倉美月（41）。椅子に座り、パソコンの画面を見ている女性医師柳原伸子（48）。

クルツと座席を回して涼香に向き合い。伸子「うん、特に異常なし。先生が入れてあげた機械は、上手に涼香ちゃんの心臓動かすお手伝いしてくれてるよ」

ホッとする顔をする美月。

伸子「涼香ちゃんはなんか好きなこととかあるん？」

涼香「好きな事？ そやなあ。そうや、あんな伸子先生、この前からギター弾くようになってんで、わたし」

伸子「ギター、へえ！」

涼香「もうFのコードも押さえられるようになったんやで」

美月「この子の父親の持ってたものなんです。

なんか急に弾いてみたいとか言い出して」

伸子「そっかー。じゃあ上手に弾けるようになったら、一階のロビーで先生や入院患者さん集めてリサイクル開かなあかんあ」

涼香「うん！」

屈託のない涼香の笑顔。

### ○単坂叶え地蔵・地蔵堂

入口に百度石が置かれている、二十歩ほどの参道がある小さな地蔵堂。小さ

な地蔵本佛が祠の中に祀られている。

その前で手を合わせている涼香と美月

今里絹江（77）。

最後に三人が地蔵真言を唱える。

涼香・美月・絹江「おん、かかか、びさんま

えい、そわか」

三人、深く礼をしてから顔を上げ。

涼香「なあ、美月ちゃん、オババ」

美月「なに」

涼香「お地蔵さん、わたし長生きさせてくれ

るかなあ」

美月「そらそうや、単坂ひしえの叶ひしええ地蔵さんのご

利益は抜群ひしえなんやから。なあ、オバちゃ

ん」

頷く絹江。

涼香「そっかし、そやんな。そしたら、早い

事、お父さんとお母さんとおっちゃんが、

事故に遭いませんようにつて、頼んでたら

よかったなあ」

美月を強く横抱きにする絹江、地蔵に

向き直り。

絹江「おい、単坂のお地蔵さん、これから涼香のこと守ってやらへんかってみい、火いつけてこのお堂ごと燃やしてしまうからな、よう覚えとけ——涼香、これで大丈夫や」  
涼香「こわいなあ、オババは」

絹江を見て笑う涼香。

○タイトル

へ涼香は地蔵真言を叫んで今日を往

く

○山ヶ崎中央公園・グラウンドゴルフコート

市役所隣にある大きな公園。その一角にあるグラウンドゴルフコート。ゲームをしている老人たち。へ山ヶ崎とロゴの入った体操服を着た涼香（17）もいる。ゲームに興じている涼香。

○すずらん通り商店街

入り口にへすずらん通り商店街へと古ぼけた看板がつるされた、アーケードのある商店街。歩いていく涼香。

○駄菓子屋へのじぎくゝ店内

商店街の中にある駄菓子屋へのじぎくゝ。

店頭に貼られた朱書きの【当店現金払いのみ。電子マネーとかは不可】の貼り紙。

小学生の男女六人がぎやかに駄菓子を選んでいる。

古ぼけたレジが置かれた机の前の椅子に座り、スポーツ新聞を読んでいる店主の絹江（83）。店に入ってくる涼香（17）

涼香「お、今日も生きとったかオババ」

絹江「やかましい」

涼香「独居老人の生存確認してやってるんじゃないの。ありがたく思っほしいわ」

絹江「おまえこそ今日もよう生きて帰ってき  
たわい」

シツシツと手を振り追い払う仕草をす  
る絹江。

涼香「ほんまにかわいげないなあ」

絹江「どっちがじゃ」

フツと笑い店を出ていく涼香。

○居酒屋へみつき〓店前

へなじぎく〓の隣にある居酒屋へみつ

き〓。準備中の札が下がっている。引

き戸を開ける涼香。

涼香「ただいまー」

店に入る涼香。

○前同・店内

八人ほどが座れるLの字型のカウンタ

ー四人掛けのテーブル二つが置かれた、

清潔感に満ちた店内。厨房内、割烹着

を着て、仕込みをしている美月（4

8)。

美月「おかえり。宿題、早よ済ませてしまいや」

涼香「へえへえ」

カウンターの椅子に座る涼香。

涼香「とりあえずレイコー」

美月「そんなん言う女子高生は全国であんただけかもしれない」

涼香「ほっというて」

美月の作ったアイスコーヒーをウグウグと飲む涼香。

○前同・店前

保冷式荷台に〈東浦鮮魚店〉と書かれた軽トラックが停まる。運転席から降りてくる菅原雅道(19)

○前同・店内

発泡スチロールの箱二つ抱えて店に入ってくる雅道。

雅道「まいど、東浦です」

美月「おはようさん。今日の丸物は？」

雅道「ヒラアジのええのが」

一つの箱の蓋を開ける雅道。涼香、椅

子から立ち上がり、ヒラアジを見て。

涼香「うわぁ、ピカピカや。めっちゃイカ

ってる！」

雅道「そやろ」

涼香を見て微笑む雅道。

× × ×

夜、営業中の店内。客はカウンターに

五人。厨房の中で調理に勤しんでいる

美月と涼香。涼香、ヒラアジの造りを

拵えている。客の一人、赤塚（49）

の前に仕上がった皿を差し出す涼香。

涼香「はい、お待たせしました。ヒラアジの

お造りでーす」

赤塚「おー、旨そうやな。キラッキラ光って  
るがな。どれどれ」

造りを一切れ、口に入れる赤塚。

赤塚「うん、旨い！」

猪口の酒を口にする赤塚。

赤塚「酒にもよう合うわあ」

涼香「そやろ。モノはよし、腕はよし、や」

赤塚「そうかあ。涼香ちゃんが造った思たら

よけいにおいしい感じるなあ」

美月「悪かったわねえ赤塚さん、わたしのは

涼香のよりおいしくなくて」

赤塚「そんなこと言うてへんがなあ」

笑いに包まれる店内。

田本「涼ちゃん、ぼちぼち頼むわ」

客の田本（77）が涼香に声をかける。

涼香「田本先生、今日は泉谷、岡林？」

田本「ん、今日は泉谷」

涼香「ほんまそればっかし。たまには他のも

頼んでよ」

田本「他のは他の人が頼んでくれるやんか」

涼香「へえへえ」

家屋部に入る涼香。フォークギターを

手にして戻ってくる。テーブル席の椅

子に座り、チューニングをする涼香。

涼香「そしたら唄わせていただきます」

礼をする涼香。五人の客が拍手をする。

アルペジオで泉谷しげるの『春夏秋

冬』の前奏を奏で始める涼香。唄い出す。

涼香「『へ♪～季節のない街に生まれ 風の

ない丘に育ち 夢のない家を出て 愛

のない人に会う——』」

うんうんと頷きながら酒を呑みつつ聴

いている田本。

× × ×

涼香「『へ♪～——飲もうよ俺と 二人きり

だれに遠慮がいるものか 惚れたどうしさ

おまえとふたり酒』」

川中美幸の『ふたり酒』を唄う涼香。

× × ×

涼香「『へ♪～——若かったあの頃 なにも

怖くなかった ただあなたの優しさが 怖

かった』」

かぐや姫の『神田川』を唄う涼香。

× × ×

涼香「『へ♪〜』だから わたしの恋はい  
つも 巡り巡ってふりだしよ いつまでた  
っても恋の矢は あなたの胸にはささらな  
い』」

長渕剛の『巡恋歌』を唄う涼香。

赤塚「長渕は、やっぱり初期がええんよな  
あ」

ぐつと猪口を呷る赤塚。

○前同・店前（夜）

暖簾をしまいに出てくる美月。へのはじ  
ぎくゝの店前に腰掛けを出して、絹江  
が座り、携帯灰皿を片手に煙草を吸っ  
ている。美月、絹江を見て。

美月「早うお風呂入って寝なあかんやん、お  
ばちゃん」

絹江「涼香は今日も機嫌よう唄うてたみたい  
やなあ」

美月「ほんまに。あんなことさせてええんや  
ろかって思うんやけど。本人がやりたいっ  
て言うしなあ」

絹江「やめさせたいんか」

美月「そこまで思っていないんやけど。あの子  
の歌、聴きにきてくれるお客さんも多なっ  
てきたし。けどなあ」

絹江「けど、なんや」

美月「お兄ちゃんや晶子さんや、うちの人い  
てたら、そんなんさせてへんやろなあ、わ  
たし、怒られてるやろなあとか、思っ  
てなあ」

絹江「何年になる」

美月「六月で十一年」

絹江「そうか。まあ、しゃあないわな、今は  
あの子をあんたが育ててるんやから」

美月「うん——けど、うまいこと育てられて  
るんかなあ」

絹江「そないに心配せんでもええわいよ」

美月「そうかなあ」

絹江「道、踏み外してないやないか」

笑みを浮かべている絹江。

絹江「心臓の機械の入れ替えはいつやったか  
いな」

美月「八月の終わり。本人『夏休み伸びてラ  
ツキーヤ』とか呑気なこと言うてるわ」

絹江「ややこしい手術やないんやろが」

美月「うん。まあ、そやけどなあ」

絹江「おい」

美月「ん？」

絹江「あんたは、あの子のことを不憫な子や  
と思うとるんか」

美月「え」

美月をじっと見つめる絹江。

絹江「さて、ぼちぼち寒うなってきた。言わ  
れた通り風呂入って寝るべえよ。おやす  
み」

美月「うん、おやすみ」

絹江、店と店の間の路地へと入って行  
く。美月、暖簾を手にして、店の中へ

と。

○佐倉家・風呂場（夜）

立って体を洗っている涼香。石鹸つけたタオルで、撫でるように左胸をあらっていく。

涼香「おん、かかか、びさんまえい、そわか。

おん、かかか、びさんまえい、そわか……」

涼香、地藏真言を唱えながら洗っている。

(F・O)

○西邦学院高校・校門前

生徒たちが帰宅している。

○前同・体育館

女子バレー部が練習をしている。紅白戦。鋭いスパイクに体を投げ出し、ボールを拾い上げるリベロの松永莉緒。大きな声でチームを鼓舞し、練習を続

ける。

○帰路

女子バレー部員、A、B、Cと帰宅している莉緒。

A「今日もキレイやったな莉緒は」

B「うん、竹野先輩より絶対実力上やで、莉緒は」

C「うん、わたしもそう思う。この前の春季リーグ戦、あの人全然やったやん。莉緒最初から出してたら、決勝トーナメント行けたはずやで、絶対」

A「莉緒入った三試合目、先輩らの動き、全然違ったもんな」

B「うん。けど、二連敗してから出しても遅いわ」

C「今度の春季大会からは、莉緒がレギュラーやな」

A「うん、わたしもそう思うわ」

莉緒「——あんな、あんまりそういうの、周

りに言わんといてな」

B 「なんでよ。事実を言うてるだけやろ、わたしらは」

莉緒「けど、竹野先輩な。ほら、なんていうか——」

A 「まあなあ、クセ強いからな、あの人」

B 「ジェラシーえぐいしな」

C 「こそつと言うたろか、竹野先輩に。『松永さんがレギュラーはもらったって言うてましたよ』って言うてたって」

莉緒「怒るよ」

C 「嘘に決まってるやん。真面目か！」

笑う四人。

A 「けど、ほんまに頑張ってるな。同いの中でレギュラー最初に取るのは莉緒に間違いないんやから。わたしらも莉緒に負けんようにがんばるからな」

A を見つめる莉緒。強く頷く。

莉緒「絶対にわたしらの代で近畿大会行こな」

古豪西邦、復活や」

頷く三人。

B 「けど、全国って言わんところが、莉緒らしいなあ」

C 「たしかに」

莉緒「しっかり足元見てるんや、わたしは」

四人、楽し気に帰っていく。

○バスターミナル・待合所

屋内に並べられたベンチの一つに座っている私服の莉緒。駐車場にバスが到着するのを見て立ち上がる。

○バス車内

座席に座っている莉緒。スマホを操作している。

○終点に着くバス

降りる莉緒。南方、遠くに見える白亜の城を見やる。歩き出す。

○アーケード下の繁華街

行き交う人の中を歩いていく莉緒。こじんまりした喫茶店に入る。

○喫茶店・店内

テーブル席に座っている岡島（48）。

莉緒を認め、小さく手を上げる。岡島の前に座る莉緒。二人、見つめあう。

岡島「ミルクティーでええ？」

小さく頷く莉緒。

岡嶋「じゃあ、これ」

封筒を取り出し、テーブルの上に置く

岡島。莉緒、それをしばらく見つめて。

莉緒「本当に、こんなのいいのに」

岡嶋「取っというて、ぼくの気持ちや——って

一連のやりとりやな、これ」

微笑む岡島。やがて莉緒も笑う。封筒をポーチに収める莉緒。

○動物園・園内

並んで歩いている二人。特に会話もなく、動物の檻の前で立ち止まったりしながら。

○前同・屋外休憩所

屋根があり大きなテーブルが十ほど置かれていた休憩所。そこで向かい合って座っている莉緒と岡島。

岡島「今日もありがとう」

莉緒「いえ」

岡島「部活の方はどう？」

莉緒「もうすぐ春季大会です。たぶんレギュラーになれると思います」

岡島「すごいなあ！一年生でレギュラーか」

莉緒「がんばってますから」

笑顔を見せる莉緒。岡島も笑う。

○へ岡島の回想へ

市民体育館、中学時代の莉緒が試合を

している。鋭いスパイクをしっかりレ  
シーブする莉緒。チームメイトを鼓舞  
し、生き生きとプレーし続ける莉緒。

二階客席では、市の体育協会の福原  
(59)と岡島が、首からスタッフパ  
スを下げて、並んで座り試合を見てい  
る。岡島の手には望遠のカメラ。

福原「やるやないか、あの東中のリベロの  
子」

岡島「はい」

莉緒にカメラを向けてシャッターを切  
る岡島。

福原「来月の体協の広報誌、あの子取り上げ  
てみよか」

岡島「はい、ぼくもそう思っていました」

福原「試合終わったら、話ししに行こか」

岡島「はい」

岡島、尻を何度ももぞもぞさせる。

福原「なんや、どないしたんや」

岡島「いや、昨日から太ももの付け根にちっ

こいデキモノができて……」

福原「ははっ、コンビニ弁当ばかり食べてるからそないになるんじゃない。今度市がやる

婚活パーティーに、参加してみんかい」

岡島「はあ」

岡島、勃起している。尻を動かしながら

ら莉緒に向かってシャッターを切り続ける。

(岡島の回想・終わり)

○動物園・屋外休憩所に戻って

岡島「莉緒ちゃん」

莉緒「はい」

岡島「手え握らせてくれへんか」

莉緒「え」

岡島「ごめん、こんなん言うの初めてやな―

―真希、娘が生きてたらどんな手の大きさになってたんやろうって思ってたな」

岡島の目をじっと見つめる莉緒。右

手を差し出す。両手でその手を握り

しめる岡島。

岡島「ありがとう——」

莉緒、岡島の手をそっと握り返す。

○アーケード下の繁華街

並んで歩いている莉緒と岡島。莉緒の

方から岡島の手を取り、腕を絡める。

驚く岡島。莉緒、岡島を見て笑う。

莉緒「仲良し親子のデートって体で」

岡島「莉緒ちゃんはほんまに優しい子やなあ

——そや、今日はバスで帰るのやめ。山ヶ

崎のバス停まで送ってったるわ」

莉緒「え」

岡島「仲良し親子やったら、いっしょの車に

乗ってたかて、なんの不思議もないやろ」

莉緒「うん、そやんね」

二人、腕を絡ませ歩いていく。

○岡島が運転する車の中

運転している岡島。助手席の莉緒。ま

つすぐ前を見ているが、何度も瞼閉じかけ、ときにガクンと首が落ちる。そのたびブルブルと首を振り、前を向く莉緒。横目でそれを見て微笑む岡島。

岡島「疲れたんやろ。遠慮せんと寝たらええ。

山ヶ崎のバス停着いたら起こしたるから」

莉緒「はい、すみません」

首を横に傾け、目を閉じる莉緒。しばらくして寝息を立て始める。

### ○車道

岡島が運転する車が夕暮れの中を疾走していく。

### ○ラブホテル駐車場・車内（夜）

車内、眠っている莉緒を揺り起こす岡島。

莉緒「ん……山ヶ崎着いたん？」

莉緒をじっと見つめている岡島。首を横に振る。

莉緒「え、そしたらここ……」

岡島「部屋、行こか」

莉緒「え」

岡島「仲良し親子や。べつに一緒のベッド

で寝たかておかしいやろ」

莉緒の手を握る岡島。状況を察し、カ

タカタ震えだす莉緒。

岡島「震えてるんか、かわいいなあ。何にも

怖がることあらへん。莉緒ちゃん、ほんま

はな、俺、君のこと初めて見たときから、

もう好きで好きでたまらんかったんや」

莉緒の手を勃起した股間にあてがおう

とする岡島。莉緒の震えが大きくなる。

莉緒「や、やめて」

助手席のドアを開けようとするが、ロ

ックされていて開かない。パニックに

なる莉緒。

岡島「俺のこと嫌いやないんやろ。な、ええ

やないか。俺、どんだけがまんしてた思う。

ずっとがまんしてたんやで。一年、ほんま

にほんまにがまんしてたんやで。そやけど、  
そやけどな、もう限界や。限界なんや」

莉緒、わめく。莉緒を抱き寄せようと  
する岡島。莉緒、頭を大きく後ろにや  
り、反動つけて額を岡島の鼻に思い切  
りぶち当てる。

岡島「ぐあっ！」

岡島の鼻から激しく血が吹き出る。す  
かさず車のホーンを鳴らし始める莉緒。  
岡嶋、止めようとする。その手を振り  
払い、何度もホーンを鳴らす莉緒。  
駐車場にホーンの音がけたたましく響  
き続ける。

(F・O)

○秋村内科クリニック・外景(夜)

クリニック内の電気がすべて消される。

○秋村家・外景(夜)

クリニック裏手にある秋村家。豪邸と

呼んでいいほどの瀟洒な造りの二階家。

○前同・朋美の部屋（夜）

きれいに整頓された朋美の部屋。机を前にして座っている朋美。その隣で家庭教師の浜村織枝（27）がノートを広げ、赤ペン片手に採点をしている。

織枝「うん、よし。二十問全問正解」

ノートを朋美に手渡す織枝。

織枝「週一の楽なバイトや。お父さんとお母

さんからええ遺伝子貰ったんやから、それ

活かしてええお医者さんにならんなあ」

朋美「織枝さん」

織枝「ん？」

朋美「医者之家に生まれたからって、医者にならんとアカンのですか」

織枝「——えらいまた剛速球できたなあ。朋

美ちゃんは何か将来やりたい事とかあるのんか？」

朋美「いえ、べつにそんなのは。けど」

織枝「けど？」

朋美「織枝さんはお父さんがアルコール依存症で、子供のころからしんどい思いしてきてんでしょ」

織枝「そうや。家の中しっちゃかめっちゃか。

このオッサン、包丁で刺し殺したろかって何回思ったか分からんわ」

朋美「けど、けどそれが、そういう人や、巻き込まれてる家族救うために、アルコール依存症治すお医者さんになるきっかけやったんでしょ」

織枝「まあ、そうかな」

朋美「けど、わたしにはそういうきっかけがない」

うつむく朋美。

朋美「ただ、勉強が得意なだけや」

しばらく朋美を見ている織枝。やがてフツツと笑って。

織枝「勉強できるのがコンプレックスかあ」

足元に置いていたビニール袋の中から、

紙箱とお茶のペットボトルを取り出す

織枝。紙箱の蓋を開ける。コロツケが

二個入っている。

織枝「これな、一回朋美ちゃんに食べさせた

ろ思つて、テイクアウトしてもらてん。商

店街の居酒屋へみつき。知らん？」

朋美「へみつきですか。そこ、たぶん中学校  
校

の同級生の家です」

織枝「ありゃ、そうなん。それやったらこの

コロツケ揚げたのその同級生やわ、きつ

と」

朋美「え」

織枝「ランチもやっててな。ときどき行くん

よ。今日はコロツケ&から揚げ定食」

朋美「そうなんですか」

織枝「うん。土曜は朋美ちゃんといっしょく

らいの女の子が手伝ってるんやけど。そう

か、同級生やったか」

朋美「朝本涼香さんっていいいます」

織枝「そっか。人間な。お腹すいてるときに深く物事考えたらアカンで。これ、三浪して医学部入った人間の実感」

紙袋に入れられたコロツケを朋美に渡す織枝。朋美、口に入れる。

織枝「どう？」

朋美「すごくおいしいです」

織枝「そやろ。『わたしが作りました。さめてもおいしいですよ』って言うてたわ」

織枝もコロツケを一口。

織枝「うん、ほんまや。さめてもおいしいわ」

朋美「朝本さん、ペースメーカー入れてるんです」

織枝「え」

朋美「生まれつき心臓が悪いらしくて。だから体育の授業は見学かレポート提出でした。山高入った今でもそうやと思います」

織枝「そう」

朋美「それに、小さいときにご両親事故で亡

くされてて。おばさんの家に住んでるって」

織枝「仲、よかったん？」

朋美「特には。でも」

織枝「なに」

朋美「今思ったら、もっと仲良くしてたらよかったです。なんかそんなん思わせる人です」

織枝「それやったら、食べにいったらどない。

朝本さんの料理」

朋美「え」

織枝「ランチやったら、女子高生が居酒屋入ってもかまへんやん」

微笑んでいる織枝を見つめる朋美。そして、またコロッケを一口。

朋美「やっぱりおいしい」

織枝「揚げたてはこの何倍もおいしいで」

朋美「そうなんや」

朋美、うんうんと頷きながらコロッケを食べる。

○山ヶ崎中央公園

私服の莉緒がブランコに座っている。  
覇気のないその顔。グラウンドゴルフ  
に興じている老人たちをポーっと見て  
いる。その中に涼香もいる。

○山ヶ崎中央公園前の道路

自転車に乗り帰っていく朋美。公園前  
を行き過ぎかけるが、ブレーキをかけ  
自転車を止める。ブランコに座ってい  
るのが莉緒だと認める。莉緒が涙をぬ  
ぐっているのを見る。

○〈莉緒の回想〉

西邦学院高校・女子バレー部部室

八畳ほどの薄暗い部室の中、莉緒と他  
の部員二十名が対峙している。俯いて  
いる莉緒。部員たちのいちばん前にい  
る竹野千佳。

千佳「お金もらってたんやろ、その体協の人から」

莉緒「お金って——交通費と……」

千佳「交通費と？」

莉緒「最初は断ったんです。けど」

千佳「けど、なによ」

莉緒「親が子供に小遣いやるみたいなものやからって」

千佳「なんぼよ」

莉緒「——一万円」

千佳「会うたびにい？」

小さく頷く莉緒。千佳の嘲り嗤い。

千佳「なんぼ独身やからいうて、ええ年したオジサンと月一でデートして、お金もらってやあ。そんなんがつつりパパ活やん。なあ」

振り向き同意を求める千佳。頷く部員たち。顔を上げる莉緒。

莉緒「嘘やったんです全部。奥さんと子供、事故で亡くしてるって最初に聞かされて。」

それ、ずっと信じてて——騙されてたんです。そやから『自分の娘が生きてたら莉緒ちゃんみたいやっただかなあ』とか言われて。ほんまのこと知ってたら、そんなん絶対してません」

千佳「超絶いいわけ。あんた、お母さんと二人暮らしやんなあ」

莉緒「え」

千佳「会ってること、お母さんに言うてたん？」

小さく首を横に振る莉緒。

ふふんと笑う千佳。キャプテンの小林

菜穂を見る千佳。

千佳「菜穂、バレー部としてはどうするん、

この子。学校の処分は二週間の停学やけど」

菜穂「決を採ります。松永の処分、特に課さなくてもいいと思う人」

誰も手を挙げない。

菜穂「では、学校と同じ部活参加禁止がいい

と思う人」

また誰も手を挙げない。

菜穂「じゃあ最後——退部が相当だと思  
う人」

全員が手を挙げる。

菜穂「松永、こういう結果になった。わたしもみんなと同意見。なんぼ技術が高くて伸びしろがあっても、あんたといっしょに練習して、同じ試合のコートに立つのはお断りやわ。あんたは名門西邦学院高校女子バレー部の名前に泥ぬったんや」

すすり泣き始める莉緒。

千佳「泣いたかて誰も同情なんかしてくれへんわ、アホ」

菜穂「この結果、監督に伝えに行くから。松永——さんも明日中に退部届け書いて監督のところへ持って行ってください。はい、じゃあこれでこの話はこれで終わり。練習始めるよ！ 体育館行ってアップ開始！」

部員たち「はい！」

出ていく部員たち。最後になる部員A、

B、C。

A「パパ活女、顔も見たくないわ」

B「キツシヨ、ゲー出るわ」

C「あんた、その人とほんまに会うだけやっ  
たん？」

言い放ち三人が出ていく。一人残った

莉緒、うずくまりむせび泣く。

(莉緒の回想・終わり)

○山ヶ崎中央公園前の道路に戻って

何度も涙を拭い続ける莉緒をしばらく  
の間見ている朋美。やがて、また自転  
車をこぎだし、去っていく。

○すずらん通り商店街

私服で歩いていく朋美。へのじぎく  
の前を過ぎ、暖簾が出ているへみつ  
きぐの前で足を止める。立てかけてあ  
る小さな黒板に【日替わりランチA・

お造り定食 B・唐揚げ&生姜焼き定食 850円】と書かれている。少し躊躇するが、戸を引き開ける朋美。

○へみつき◇店内

美月「いらっしやいませ」

カウンターの月から美月が声をかける。

涼香「いらっしやいませえ——あれ、秋村さんやん」

朋美「こんにちは」

小さく会釈する朋美。

× × ×

厨房の中で、から揚げを調理している

涼香。その様子を見ている朋美。

× × ×

B定食を何度も頷きながら食べている

朋美。

涼香「どない、秋村さん」

朋美「すごいわ。こんな自分で作れるなんて、もうプロやん朝本さん」

涼香「おいしい?」

朋美「最っ高」

美月「そんなにおだてんといて秋村さん。この子すぐ調子にのるから」

涼香「なによ、うるさいなあ。秋村さん心からそう言うてくれるんやから。なあ」

微笑んで頷く朋美。

朋美「うん、ほんまにおいしい」

涼香「ありがとう」

涼香も笑う。

○前同・店前

向かい合っている涼香と朋美。

朋美「想像以上のおいしさやった」

涼香「ありがとう。すごい自信になるわ」

朋美「お店、継ぐんやね」

涼香「え、うん。そんな感じになるんかなあ。

ほら、わたし簡単に普通の就職とか難しいかもしれないからさ」

朋美「——なんか、変なこと訊いてごめん」

涼香「ううん、ええんよええんよ。気にせん

といて。ここでやったら自分のペースで本  
気で料理勉強できるやん。わたしな、卒業  
したら調理師免許取ろう思ってるんよ」

朋美「へえ、そっか」

涼香「それに、わたしの歌、楽しみにしてお  
店きてくれるお客さんも多いから」

朋美「歌？」

涼香「うん。わたし夜十時までお店手伝って  
てな、そのときギター弾いて唄ってるん。

お客さんからリクエストされた曲」

朋美「へ、リクエスト？」

涼香「お父さんの形見のフォークギターでな。

最初は遊び半分やってんだけど、お客さんが  
次々言うてくるようになったから、こっち  
もなんかその気になってきた、みたいな」

朋美「どんな歌、唄ってるのん？」

涼香「秋村さんが聴いたことないような歌ば  
っかり。演歌とか、フォークソングとか。

うちのお客さん年齢層高めやから、そんな

んしかリクエストしてきいひん」

朋美「なんかすごいなあ、朝本さんは」

涼香「なにがあ。秋村さんこそ後継いで、医学部行ってお医者さんになるんやろ。すごいわあ、かつこええわあ」

朋美「さあ、どうやろ」

涼香「ちがうん？」

朋美「どうなんかなあ——なあ、来週も来てええかな。朝本さんの料理、また食べたいわ」

涼香「こっちからお願いするわ。毎週土曜のB定食はわたしが考えてるんやで。来週はエビマヨとホイコーローにしようって思ってる。初めて中華に挑戦や」

朋美「マジで！どっちもめっちゃ好きやし！楽しみにしてる！」

涼香「はい、お客さん一人ゲットお！」

朋美「ゲットされてしもた」

笑いあう二人。

涼香「そや、秋村さん。松永さんどうなった

ん?」

朋美「え、知ってるのん?」

涼香「山高でも噂になってる。興味本位で訊いてるんやないんやけど」

朋美「うん、春休み明けすぐに停学になって、そのまま学校やめた」

涼香「やめたん、西邦」

朋美「うん、自主退学」

涼香「——なあ、あの子の卒業式終わった後のクラスでのあいさつ、覚えてる?」

朋美「うん。『西邦のバレー部入って全国大会絶対出ます』って泣きながら言うてた」

涼香「それやのに」

朋美「わたしこの前な、バスターミナルから帰るとき、あの子見たんよ」

涼香「どこで?」

朋美「中央公園。あの子ブランコ乗って、お年寄りがグラウンドゴルフやってるのん、ポケーって見てた」

涼香「グラゴル、見てたん?」

朋美「うん」

涼香「その中にわたし、たぶんいてたわ」

朋美「え」

涼香「主治医の先生が、若いんやからできる範囲で体力もつけなあかんって。グラゴルやったら最適やって。そやから、やってる」

朋美「そうなんや——あの子泣いてた」

涼香「泣いてたん？」

朋美「うん。何回も何回も目えゴシゴシやってな。けど、わたし声かけられへんくて」

涼香「西邦に友達とかいてへんかったん？」

朋美「バレエ部にいてたみたい。けどその子らが、松永さんのこと言いふらしてる。ひどい嘘も混ぜて毎日言ってるわ」

涼香「ゲスやん」

朋美「うん」

黙り込む二人。

涼香「なあ、今から行ってみいひん中央公園」

朋美「今から？」

涼香「うん。居てるかも分からんやん、松永さん。ほっとける、秋村さん」

朋美を見つめる涼香。

涼香「泣いてたんやろ」

頷く朋美。

涼香「今、ひとりぼっちなんやろ」

また頷く朋美。

朋美「わたし、あのととき声かけたらよかつた」

涼香「今からでも遅ない」

朋美「うん、でもいてるかな」

涼香「それやったら、会える日まで待つだけや」

朋美「うん。行ってみよか」

頷く涼香。

涼香「ちょっと待って。着替えてくるわ」

戸を開け、店に入る涼香。

○舗道

並んで歩いていく涼香と朋美。中央公園が見えてくる。

涼香「そや、ちよつと願掛けに行こか」

朋美「願掛け？」

頷く涼香。

涼香「道渡って、単坂いうちっこい橋超えたら叶え地藏さんや。知らん？」

朋美「知らんわ」

首を横に振る朋美。

○単坂叶え地藏・地藏堂

地藏本尊の前で手を合わせている涼香と朋美。

涼香「叶え地藏さん、どうか今日、松永莉緒さんに会うことができますように。おん、かかか、びさんまえい、そわか」

涼香を見る朋美。

朋美「え、なにそれ」

涼香「なにが？」

朋美「その、おん、なんちゃらっていうの」

涼香「ああ、お地蔵さんの真言。お願いする  
ときに唱える言葉なんや」

朋美「ふーん。朝本さん、ここ、よう来るの  
ん？」

涼香「うん、グラゴル終わった後、たまに  
な」

朋美「そっか」

再び地蔵に向かって手を合わせる涼香  
をじっと見つめる朋美。

× × ×

参道途中に置かれてある縁起の石碑を  
読んでいる朋美。彼女を見ている涼香。

○山ヶ崎中央公園

ブランコに乗っている涼香と朋美。

朋美「三日がかりで田んぼから掘りだされた  
んかあ、あのお地蔵さん」

涼香「うん、書いてたやろ。三日連続で田ん  
ぼの持ち主の夢に出てきてな、あっちゃー、  
こっちゃー、ご苦労さん、もうちよつと深

く掘ってやーって言うてな」

朋美「初日で『ここにいるから掘りだして

』って言うたらええのに」

涼香「焦らしプレイ好きやったんちゃう？」

顔を見合わせる二人。笑う。

× × ×

朋美「来やへんかあ」

涼香「もうちよつと待ってみよ」

朋美「うん——あんな、わたしな、松永さん

が自分からパパ活するやなんて思われへん

のよ」

涼香「わたしもや。その気持ち信じて、待っ

てみよ」

朋美「うん」

× × ×

スマホを取り出し、ラインの交換をし

ている二人。

× × ×

夕暮れは始めている。ブランコから立

ち上がる涼香。

涼香「今日はお地藏さんのご利益もなかった

かあ」

朋美「わたし、今度帰りに見かけたら、声かけるから、絶対」

朋美も立ち上がる。

涼香「うん、わたしもグラゴルしながら気に

しとくわ」

二人、踵を返す。

俯きながら莉緒が歩いてくる。驚く涼

香と朋美。二人の少し手前で顔を上げ

る莉緒。見つめあう二人と一人。

莉緒、二人に背を向け帰って行こうとする。

涼香「待ってよ、松永さん！」

涼香、早歩きで莉緒の前に立つ。

涼香「待ってたんや、わたしら待ってたんや

で、松永さんがここに来るの」

莉緒「のいてよ、帰るわ」

涼香「のかへん！」

驚く莉緒。

涼香「待ってた言うてたやろ、のかへん！」

莉緒「なんでわたしなんか待ってたん？」

涼香「え」

莉緒「なにを訊きたいのん。パパ活女の裏話？ それやったらなんぼでもしてあげる

けど」

薄く笑う莉緒。

涼香「松永さん——」

涼香の横を通り過ぎようとする莉緒。

朋美「したらええやん！ なんぼでも聞いて

あげるからしたらええ！」

叫ぶ朋美を見る涼香と莉緒。

朋美「けどな、その前にちゃんと食べてからや。そんなに痩せて……なあ、朝本さ——

涼香」

涼香、頷く。

涼香「おいしいのなんぼでも食べさせたるわ。

お腹にちゃんとももの入れてから聞かせてもらうし、そのパパ活女の裏話、いうやつ」

朋美、歩を進める。莉緒の前に立つ。

朋美「松永さんがここで泣いてたのん、わたし見てたんよ。けど、声かけてあげられへんかった。ごめんな。東中から西邦行ったんわたしらだけやのにな。遅なつてしてもて、ほんまにごめんな」

莉緒を抱きしめる朋美。

莉緒「あつ、あつ、あううつ」

泣き出す莉緒を強く抱きしめる朋美。

涼香「今回は焦らしプレイせんかったか、お地藏さん」

微笑んでその様を見ている涼香。

○へみつき〓店内

準備中の店内。カウンター席に座っている朋美と莉緒。

厨房で調理をしている涼香と美月。

莉緒「二人とも知ってるんや思うけど、小三のときに親が離婚してな」

莉緒を見る涼香と朋美。

莉緒「そやから、お父さんいてへんで。会う

のもできひんで。そやから、そやからな、  
もしお父さんいてたら、こんな感じなんか  
なあ、とか思っつて。それで会うようになって  
それから——」

涼香「はい、オツケー！」

おたまを莉緒に突き出す涼香。

涼香「今ので全部了解。なあ、朋美」

朋美「うん」

莉緒の手を優しく握る朋美。

×

×

×

涼香「はい、和風八宝菜と高野豆腐にほうれ  
んそうのおしたし。お味噌汁はなめことわ  
かめ。ごはん、なんぼでもおかわりして  
や」

厨房から出て来て、膳を莉緒の前に置

く涼香。

朋美「なあ、わたしのんは？」

涼香「待ちいな。今持ってくるから。ていう  
か、お昼のB定食べたとこやん、あんた」

朋美「お昼はお昼、今は今やん。お腹すいて

るんやもゝん」

涼香「へえへえ」

いったん厨房に戻り、朋美の前にも膳を置く涼香。

朋美「うわー、おいしそう。いただきまーす」

レンゲを手にして、和風八宝菜を口に運ぶ朋美。

朋美「うん！ うんうん！」

莉緒、俯き、黙ったままにいる。

美月「なあ、松永さん」

美月を見る莉緒。

美月「人間な、どんなときでもお腹はへるよ  
うにできてるんよ。そやのに自分からご飯  
食べへんっていうのは、自分で自分苛めて  
るんやで。そんなんしたらあかんよ。な、

涼香の作った料理、食べてやって」

しばらくして、顔を上げ、レンゲを手に取り和風八宝菜を口に運ぶ莉緒。ゆ  
っくり咀嚼し、食べる。涙があふれ、

こぼれる。それを拭う莉緒。

莉緒「——おいしい」

涼香「そやろお。ご飯に乗せてもおいしいで。

高野豆腐もどうぞ」

頷き、高野豆腐を口にする莉緒。

涼香「どない、うまいこと炊けてる？」

何度も頷き、むせび泣く莉緒。

朋美「ゆっくり食べたらええよ」

莉緒「おいしい、おいしいよ……」

泣きながら食べていく莉緒。

× × ×

営業中の店内。赤塚と田本がカウンタ

ー席に座って呑んでいる。厨房では、

美月がスマホで喋っている。

美月「——はい、なにもご心配なさらずに。

いいえ、そんな。お気にされませず。今日

は責任もって娘さんをおあずかりさせてい

たきますので。はい、はい。こちらこそ

今後ともよろしく願いたします。はい、

では。失礼いたします」

通話を終える美月。入口ドアが開く。

美月「はい、いらっしや、ああ、涼香」

涼香、両手に菓子やジュースがいっぱい入ったビニール袋を持って立っている。

赤塚「涼香ちゃん、友達来てるんやって?」

涼香「うん。今からお泊り会や」

赤塚「そうか。残念やなあ。そしたら今日は

涼香ちゃんの歌、聞けへんのかあ」

田本「友達はなにより大切にせなあかん。赤

塚くん、今日はじつとガマンの子や」

涼香「また今度、今日の分もまとめて唄ったげるし」

家屋部へ向かおうとする涼香。

美月「涼香」

涼香「なに」

美月「今、松永さんのお母さんと電話で話したところ。やっぱりあの子最近ほとんどご飯食べてなかったそうやわ」

涼香「うん」

家屋部へ入る涼香。

○佐倉家・涼香の部屋（夜）

スナック菓子が置かれた円卓の前に座っている涼香、朋美、莉緒。パジャマ姿の涼香。へ山ヶ崎東のロゴが入った

中学時代の体操服を着ている朋美と莉緒。

朋美「おっとまり、おっとまり、おっとまり  
ゝ。ウーイエイ！」

ゴロンと床に横になり、足をバタつかせる朋美。

涼香「なにをそんなにはしゃいでるんよ」

朋美「せやかてわたしお泊り会なんか初めて  
やもーん。おっとまり、おっとまりゝ。ウ  
ーイエイ！」

涼香「さっきからなんなん、それ？」

朋美「知らんのん、ウーイエイよしたかやん。

MBSの『せやねん！』視てへんのん？

あれのへスマイル工務店へのコーナーめっちゃおもろいで。今日も予約録画して涼香のとおお昼ご飯食べに来たんやから」

涼香「朋美お笑いとか好きやったんか」

朋美「そうや」

涼香「へーえ、意外やなあ」

朋美「お勉強ばっかりやったら息つまるわ。」

最近の一押しはやっぱりトム・ブラウンやなあ。M-1の敗者復活のネタなんかヤバイで。録ってるのん何回視返したか分からへん。たぶん一生視続けるやろな、あはは」

笛ラムネを口にして、ピーと吹く朋美。

莉緒「あの、二人ともありがとう」

莉緒を見る二人。

莉緒「今日、二人がわたしのこと待っていてくれてへんかったら、わたし」

涼香「どうなってたん？」

莉緒「――」

涼香「先のこと考えよ」

莉緒「うん」

朋美、両胸に手を当てて。

朋美「どうも、上戸彩、です！」

涼香「なんなんそれ？」

朋美「トム・ブラウンみちおのM-1のときの  
つかみ」

また笛ラムネを吹く朋美。

涼香「キャラ完全崩壊してしもてるやん、あ  
んた」

笑う涼香。莉緒も微笑む。

○へみつき〓入口（夜）

暖簾をしまいに出てくる美月。へんのじ

ぎく〓の店前に腰掛けを出して座って

いる絹江。携帯灰皿を片手に煙草を吸  
っている。絹江、美月を見て。

絹江「店閉めるちょっと前に涼香来て、菓子  
やらジュースやら勝手に持って行ったぞ」

美月「ごめんね、明日お金持って行かせるか  
ら。友達が二人来て泊まってるんよ」

絹江「なんか、そんなこと言うてたな」

美月「なあ、絹江さん」

絹江「なんや」

美月「涼香はなんというか、なかなかたいした子なんかもしれんなあ」

絹江「そやから言うてるやろ。あんたはあの子を上手い事育てられてるいうて」

ふーつと長い煙を吐き出す絹江。

○佐倉家・涼香の部屋（夜）

布団の上に横になっている三人。スマホを取り囲み、トム・ブラウンの漫才を視て爆笑している。

× × ×

布団の上に座っている三人。

涼香「確かにヤバいな、トム・ブラウン。めっちゃおもしろいわ」

朋美「な、そやろお。どやった、莉緒」

莉緒「なんか久しぶりに声出して笑った」

朋美「トム・ブラウンの二人に感謝せなあかんな」

朋美、部屋の隅に立てて置かれている  
アコースティックギターを見る。

朋美「あれでいっつも唄ってるのん？」

涼香「え、うん、そうや」

朋美「なあなあ、なんか唄ってよ」

涼香「え」

莉緒「あ、わたしも聴きたい」

二人に見つめられる涼香。

涼香「しゃあないなあ」

涼香、ギターを取りに立ち上がる。再

び二人の前に胡坐をかいて座り、ギタ

ーを構え、弦をチューニングする。

涼香「なにがええかなあ」

朋美「なんでもええよ、涼香が得意なやつ」

涼香「そんな言われてもなあ、基本なんでも得意やから」

朋美「うーわ、なにそれ超テング。そしたら

新しい学校のリーダーズで『大人ブルー』

お願いしまーす」

涼香「あ、ごめんなさい、そういうのはちよ

つと無理っす」

朋美「そやろお」

笑う三人。

涼香「まあこんな日やから、これいきましょ

かあ——『へ♪』友よ 夜明け前の闇の中

で 友よ 戦いの炎を燃やせ』」

岡林信康の『友よ』をアルペジオで弾

き語り始める涼香。

涼香「『へ♪』夜明けは近い 夜明けは近い

友よ この闇の向こうには 友よ 輝く明

日がある』——ってどう?。」

弾きやめる涼香を見つめる二人。

朋美「なんて歌、それ」

涼香「そのまんま、『友よ』。岡林信康って

人の歌。『フォークの神様』って言われて

たんやって。今日も店来てたんやけど、田

本さんって元中学校の先生やった人が、い

っつもリクエストするんよ。学生運動のと

きに流行ったんやって」

朋美「学生運動って、前にテレビで見たこと

あるけど、大学生がデモとかやってたやつやろ。ナントカはんたーいとか言うて」

涼香「うん。この前田本さん、それいっしょにやってた友達のおじいちゃん二人連れてきてな、やかましいくらい盛り上がってたわ。アンボとかゼンキョートーとか言うて」

朋美「へーえ」

涼香「『三人とも意識高い系やったんですねえ』言うたらえらい笑ってたわ。もう一人今日も来てたんやけど、田本さんの教え子で赤塚さんって人がいててな、この人はナガブチとかハマシヨーとかばっかりリクエストしてくるんや」

朋美「ナガブチ？ ハマシヨー？」

涼香「長瀬剛と浜田省吾。知らん？」

朋美「知らんわ」

涼香「まあ、いまどきの女子高生が知らんでも仕方ないわな」

朋美「『今どきの女子高生』って、あんたも

やん」

涼香「わたしは特別や。でな、その赤塚さんから、歌作ってくれえって言われてるんですよ」

朋美「歌を？」

涼香「うん」

朋美「それって作詞作曲しろってこと？」

涼香「そう」

朋美「やったことあるん？」

涼香「ない。ないから苦労してるわけよ」

莉緒「全然できてないのん？」

涼香「え？ いや、こんな感じでいこかなあ

って、最初だけ出来てるんやけど」

莉緒「聴かせて、その出来てるところまで」

朋美「うん、わたしも聴きたいわ」

二人を見る涼香。

涼香「うん」

ギターを構え直し、爪弾きだす涼香。

涼香「へ♪胸ぐらのど真ん中／空いたがら  
んどうの／でかい穴／びょうびょうと風／

吹き抜けて／うるさいんやよ——ここま  
で」

莉緒「完成させて、それ」

涼香「え」

莉緒「全部できたの、聴きたい」

朋美「うん、わたしも」

涼香「分かった、頑張って仕上げるわ」

涼香、二人を見て微笑む。

× × ×

電気が消され、布団に入っている三人。

涼香と朋美は眠っているが、莉緒は起

きている。その様子にそれぞれの声が

重なる。

涼香（声）「いけるかな、ほんまに編入」

朋美（声）「たぶん大丈夫や思う。去年退学

者いてたんやろ、山高」

涼香（声）「うん、夏休み明けに一人やめて、

冬休み明けに二人やめた」

朋美（声）「それやったら欠員あるはずや。

編入の手続き、試験は編入したい高校に確

認してくださいってこのホームページには書いてあるし、一年生の単位はちゃんと西邦で取ってるんやし莉緒は。まだ新年度始まったばかりやし、絶対いけるよ」

涼香（声）「うん、莉緒、問い合わせたり、自分でできるか？」

莉緒（声）「山高にもわたしの噂流れてるんやろ」

涼香（声）「わたしがいてる、大丈夫や」

朋美（声）「うん、涼香がいてる。それに莉緒は騙されてたんや。胸張ってやりなおしたらええんやで」

涼香（声）「そや。莉緒はちよつと蹴躓いただけや。また立って歩いたらええだけや」

莉緒（声）「うん、分かった。月曜日学校に電話して訊いてみる」

莉緒、身を起こす。眠っている二人を見る。

莉緒「ほんまに、ありがとう」

布団にもぐりこむ莉緒。

○登校路

並んで登校している涼香と莉緒。同じく登校している生徒たちから莉緒に注がれる奇異の目。伏し目がちで歩く莉緒。

涼香「莉緒、胸張って。約束やろ」

涼香、莉緒の手を強く握る。涼香の顔を見る莉緒。涼香、まっすぐ前を向いて歩いている。

莉緒「うん」

涼香の手を強く握り返す莉緒。二人、前を見据え歩いていく。

○山ヶ崎高校・二年五組

担任教師と共に教壇に立ち、クラスメイトを前に深く礼をする莉緒。まばらな拍手の中、涼香が盛大に拍手をする。立ち上がる涼香。手を叩き続ける。誰も涼香を見る。拍手を続ける涼香。

宗次誠臣（17）が続けて大きく手を叩く。やがて、その拍手、クラス中に伝播していく。大きな拍手の中、再び頭を深く下げる莉緒。

○山ヶ崎中央公園・グラウンドゴルフ場

涼香から、ルールを教えてもらっている朋美と莉緒。

○前同（日替わり）

老人たちに混じり、グラウンドゴルフの試合をしている涼香、朋美、莉緒。その様子をフェンス越しに見ている誠臣。その目は涼香を追っていて。

○前同（日替わり）

グラウンドゴルフに興じている三人。莉緒、ウイニングショットを決める。

莉緒「ベストスコアや！」

ガッツポーズをして喜ぶ莉緒に老人た

ちが拍手をする。莉緒を真顔でじっと  
見ている涼香と朋美。

○マクドナルド・店内

テーブル席に座って、ハンバーガーを  
食べている涼香、朋美、莉緒。

莉緒「フィレオフィッシュバーガーってな、  
なんでか知らんけど雨の日にすごい売れる  
んやって」

朋美「へえ、そうなんや」

莉緒「うん。はっきりした理由分からへんの  
やっつて。不思議やんなあ」

涼香「莉緒。訊くけどな、あんたバレーはも  
うええのん？」

莉緒「え？」

涼香「そやから、わたしらとグラゴルやっつ  
るだけでええのん？ バレーはほんまにも  
うええん？」

莉緒「——なんでそんなん訊くん」

涼香「莉緒。わたしはこういう体やから、ち

よつとでも体力つけないあかんって思ってグラゴルやってる。朋美は、そうやな、勉強の息抜きみたいなもんや。家帰ったら寝るまでずっと勉強してるんやからな」

朋美「ずつととちがうわ。途中、スマホでお笑い視ることかてあるわ」

涼香「けどな、莉緒はちがうやろ。そら、誘ったのはこっちやけど。いつまでもグラゴルやっけてええのん?」

莉緒「ええんよ、わたしはそれで」

涼香「ほんまに?」

頷く莉緒。

涼香「バレーはもうええのん?」

莉緒「うん。もうええんよ」

朋美「莉緒。あんな、わたしも莉緒がほんまにいてやなあかん場所は公園のグラウンドゴルフ場やないって思ってるんよ」

莉緒「ええんよ、それで。バレーはもうええ」

ハンバーガーを口にする莉緒を見てい

る涼香と朋美。

○へみつき〱店前

入口の戸に定休日の札が下がっている。

涼香「そしたら行ってきまーす」

出てくる私服の涼香。へのじぎく〱も

同じく休み。腰掛けに座り、絹江が煙

草を吸っている。

絹江「どこ行くんじゃい」

涼香「ああ、オババ。お昼食べにへ塞翁軒〱

や」

絹江「日曜日に一人でか」

涼香「そや。あかんのん」

絹江「せっかくできたツレと遊びに行ったり

せえへんのか」

涼香「朋美と莉緒か。あの二人は今日は図書

館デートや」

絹江「なんやそれ」

涼香「二人で仲良くお勉強。莉緒が数学教え

てほしい言うて。朋美も人に教えることも

自分の勉強になる、いうて」

絹江「おまえはそれには行かんのか」

涼香「わたしが行ったら分からへんところだからで邪魔になる。数学なんか、どこが分からへんか、自分でも分からへんのやもん」

絹江「ほーお、呑気なやつちゃん、おまえは」

涼香「ほっといて。わたしの勉強はおいしいもん食べることなんや。〈塞翁軒〉の味、盗んできたる。ほんなら行ってくるわ。オババもタバコばかり吸うてたらあかんで」

絹江「ほっとけ。健康の秘訣じゃ。氣いつけて行ってこい」

涼香「うん」

遠ざかる涼香の後ろ姿を見送る絹江。

### ○バス停

バスが停まる。降りてくる涼香。すぐ近くにある街中華〈塞翁軒〉へ足を向

ける。

○〈塞翁軒〉店内

カウンター席に座り、天津飯とギョーザ、中華スープを食べている涼香。

涼香「なるほどな、餡に生姜が入ってるな。」

ギョーザは意外とミンチ少なめやな。刻みキャベツの歯ごたえがええな……」

何度も頷き、小声でブツブツ言いながら食べていく涼香。

四つあるテーブル席の一つに、向かい合って座っている、山ヶ崎高校の制服を着た女子生徒、萩村茉祐、新藤佳奈（ともに18）。二人とも塩ラーメンを食べている。

茉祐「結局、新生は前線三枚で終わりか」  
佳奈「上出来ちゃう。三人ともセンスある」

わ。ええ選手みんな播大付属とか西邦とか、越境で他県の学校に行ってしまうんやから、しゃあないわ」

茉祐「リベロがいる」

佳奈「あんたがいてるやない」

茉祐「わたしでは西邦に勝てん。先週の総体  
予選でフルボッコにされてよう分かった。

わたし以上に力のあるリベロが要るんや」

佳奈「あんたが頑張ったらええことやろ」

茉祐「もちろんそうや。けど、西邦に勝つに  
は、な」

佳奈「仮にさ、西邦に勝ったとしてやで、そ  
の試合に自分が出てなくてもええのん？」

強く頷く茉祐。

茉祐「そんな一ミリも関係ない。わたしの  
チームで西邦に勝つんや」

佳奈「セレクションに落とされた恨みもそこ  
までいったらたいしたもんや。それにして  
もやっぱり」

茉祐「なによ」

佳奈「日曜練習終わった後のあんたとこの塩  
ラーメンは最高やな」

茉祐「お父ちゃん、佳奈が褒めてくれてるで

え」

背中を向けたまま、軽く左拳を上げる  
茉祐の父。

椅子を回転させる涼香。ラーメンをす  
する二人を見る。やがてその視線に気  
づく茉祐と佳奈。

茉祐「はい？」

涼香「あの、山高のバレー部の方ですよね。

すみません、お話耳に入っちゃって。二年

五組の朝本涼香っていいいます。あの、リベ

ロ、います。最強の」

茉祐「最強のリベロ？」

頷く涼香。

涼香「はい、今は事情あってバレー休んでま  
すけど、実力はあります。すごいです」

佳奈「ちょっと待って、それってもしかして

西邦から編入してきた」

頷く涼香。

涼香「そうです。わたしと同じ二年五組の松  
永莉緒です」

茉祐と香奈、顔を見合わせる。二人を  
しばらく見ている涼香。

涼香「そうですか。先輩方も西邦のバレエ部  
員らといっしょですか。そしたらけっこう  
です」

二人に背を向ける涼香。

茉祐「呼べる？ 今、ここに」

椅子を回転させ茉祐を見て頷く涼香。

○へ塞翁軒へ入口

向かい合っている茉祐、佳奈と莉緒。

涼香と朋美が莉緒の横に立って。

涼香「莉緒、確認するけど、ほんまにバレエ

部に入るつもりはないんやな」

莉緒「——うん」

朋美「ほんまに、ええのんか」

小さく頷く莉緒。

佳奈「あんたのおせっかいやったみたいや  
で」

茉祐「やな」

涼香「ふーん、先輩方の西邦に勝ちたいって  
気持ちはそのまんやったんですか。押し、  
弱っ」

佳奈「あんたな、さっきからなにを偉そうに  
ばっかり言うてるんよ」

涼香「偉そうにも言いたくなりますよ。やっ  
ぱり先輩らは莉緒に入部されたら困るんや  
——莉緒、急に呼び出して悪かったな。あ  
んたの願いどおりや。これからもわたしら  
と楽しくグラゴルやろうや、なあ」

茉祐「待ちいや。わたしそんなこと言うてへ  
んやろ。松永さん、私は西邦に勝ちたい。  
心底勝ちたい。そう思ってる。あんたはど  
うやのん」

莉緒「あの、わたしが西邦やめた理由——」  
茉祐「そんなことは訊いてない。わたしが訊  
いてるのは、あんたがバレーまだ続けたい  
気持ちがあるかってこと、それだけ」

莉緒「パパ活やってたって思われても仕方な  
いです。実際やってたのといっしょやし」

茉祐「そやから、そんなこと訊いてへんって  
言うてるやろ！ バレー続けたいんか、続  
けたないんか、はつきりせえ、シバく  
ぞー！」

佳奈「シバくなよ」

苦笑いする佳奈を見て涼香も笑う。

莉緒「少し考えさせてください」

茉祐「あかん！ すぐ答えろ！ バレーもう  
一回やりたいんやったら、今ここでハイッ  
て言え！ そやなかったらイイエって言  
え！ どつちかや！」

茉祐をじっと見つめる莉緒。その目か  
ら涙がこぼれて。

莉緒「わたしは——わたしはバレーボールや  
りたい！ もう一回やりたい！」

頷く茉祐。

茉祐「勝つよ、わたし落とした、あんた追  
出した西邦に」

強く頷く莉緒。

涼香「世話のやけることやで」

朋美が莉緒の肩に優しく手を置く。  
涙を拭う莉緒。

○山ヶ崎高校・体育館

バスケットやバドミントン部などがコートを分けて練習している。その隅で集合している女子バレー部。部員たちを前にして立っている監督の難波梓（35）と茉祐。その後ろに立つ莉緒。

梓「というわけで、今日から二年五組の松永莉緒さんが入部することになりました。で、この件について、キャプテンから一言あるそうです。萩村」

茉祐「えー、松永さんが編入したいきさつについては、だいたいのところみんな分かっていると思う。でも学校が認めて編入させた以上、わたしはそういうのは気にしない。本人に入部の意思があり、わたしも彼女に入部してほしかった。監督も認めてる。だから彼女の入部については問題ないって思

ってるし、それは副キャプテンの新藤も同じ。でもやっぱりみんなの意見も聞いておきたい。松永さん入部についてなにか意見のある者はいる？ いたら遠慮なく思っていることを聞かせてほしい」

顔を見合わせる部員たち。

茉祐「ない？ わだかまり持ったままこれからいっしょに練習して試合に臨むくらいやったら、今ここで言って。後でゴタゴタしたら、それは今訊かへんかった者の責任やで」

芽衣紗「はい」

手を挙げる笹野芽衣紗（17）

茉祐「なに、笹野」

芽衣紗「そしたら遠慮なく。松永さん、実際のところどういうパパ活やってたん？」

莉緒「え、それは」

芽衣紗「言えんの？ そのところははっきり聞いておきたいわ。そやないとモヤモヤしたままいっしょに練習して、試合やらな

あかんことになる。みんなはどうか知らんけど、わたしはそうや」

他の部員たちも頷く。

莉緒「わたし——パパ活やってるやなんて気持ちにはなかった。お父さんいてたらこんな感じなんかなあ、つて。月に一回会ってた。相手もわたしといっしょの気持ちやって思ってた。娘が生きてたらこんな感じなんかなあ、とか言うから。けど、全部嘘やった——娘にあげるみたいなものやからつて、一万円くれた。それ、もらってた。もらうべきやなかった。お母さんに黙ってたのも、悪い事したつて思ってる」

芽衣紗「会うてただけなん？ ラブホで会うてるとこ補導されたつて聞いたけど」

莉緒「車で送ってやるって言われて、そのまま寝てしまつて。それで、気がついたらホテルの駐車場で、そこで襲われかけて……そんで必死で抵抗して、クラクション鳴らして、ホテルの人が来て、警察の人が来て

…：手は繋いだり、腕組んで歩いたことはある。それだけ。体の関係とかはない。嘘やない。信じてほしい」

芽衣紗「そっか。まあ騙されてたわけやな。噂って怖いなあ。正直わたし松永さん、ウリみたいなお金もらってたんやっと思ってたわ」

茉祐「納得した、笹野。みんなも」

頷く芽衣紗はじめ部員たち。

芽衣紗「にしてもシケてんなあ。相手公務員やってんやろ。最低三万くらい出せよ、ケチくさあ」

場が笑いに包まれる。

茉祐「そしたら松永さんの入部、全員がわだかまりなく認めるいうことでええね」

部員たち「はい！」

梓「よし。じゃあ松永からも入部の挨拶」

莉緒「はい——二年五組、松永莉緒。ポジションはリベロ。バレーからは少し離れていたので、基礎体力は落ちているかもしれま

せん。必死で練習して、一日でも早く戦力として認められるように頑張ります。よろしくお願いします！」

部員たち「お願いします！」

茉祐「よっし、円陣組むぞ！」

肩を組み、円陣を組む女子バレー部員たち。

茉祐「総体予選二回戦での西邦戦ストレート負け。あの悔しさをわたしは忘れていない。ついでに個人的なこと言わせてもらえば、西邦に入るセレクションに落とされた事、一生わたしは忘れへん」

佳奈「ほんまに執念深いなあ、この女は」

部員たち、笑う。

茉祐「十一月の選手権予選で絶対リベンジする。西邦に当たるところまで勝ち上がる。勝ち上がって今度こそ西邦に勝つ。そうやろ、松永」

莉緒「あ、はい」

茉祐「なんやそれ！ 声が小さい！ あんた

は西邦に勝ちたいんか、勝ちたないんかど  
っちゃー！」

莉緒「――勝ちたい！ わたしは西邦に勝ち  
たい！ 絶対に勝つ！」

茉祐「よっしゃ！ 山ヶ崎高校女子バレー部、  
今日から再出発や、行くぞ！」

部員全員「おう！」

円陣を解く部員たち。紅潮した面持ち  
でハイタッチをしていく。

その様子を二階通路から見ている涼香。

涼香「熱いなあ、激アツやん。莉緒ー」

両手を振る涼香。涼香を見る莉緒。コ  
ートに広がり、柔軟体操を始める女子  
バレー部員たち。

涼香「へ♪」『君も今日からは ぼくらの仲

間 燃やそうよ 二度とない日々を』

青い三角定規の『太陽がくれた季節』  
を口ずさむ涼香。

○山ヶ崎中央公園・周囲の桜並木（早朝）

蝉がやかましく鳴いている。青空。

○前同・グラウンドゴルフ場（早朝）

老人たちに混じり、朋美がグラウンドゴルフに興じている。その様子をフェンスの外から見ている誠臣。

× × ×

老人たちが誰もいなくなったグラウンドゴルフ場。ベンチに座り、サンドイッチを食べ、ペットボトルのジュースを飲んでいる朋美。その前に誠臣が立つ。

誠臣「秋村さん」

誠臣を見る朋美。

朋美「宗次くんやん、久しぶりやなあ！」

誠臣「久しぶり」

朋美「どうしたん？ あ、座りいや」

誠臣「うん」

朋美と少し離れて座る誠臣。

朋美「元気やった？」

誠臣「あ、うん」

朋美「どないしたん、こんな朝早くに」

誠臣「え——あ、まあ、散歩っていうか」

朋美「夏休みのこんな朝早うに？ 日課？」

誠臣「え、あ、まあ……」

朋美「ふーん」

誠臣「いや、あの」

朋美「なに？」

誠臣「あの、あんな、学校の帰りがけに、こ

こ通る時、秋村さんや朝本さんが、グラウ

ンドゴルフやってるの、見たことがあつ

て」

いぶかしげに誠臣を見る朋美。

誠臣「最初は、松永さんもいてたやんね」

朋美「莉緒は山高に編入してバレー部に入っ

た。知ってるやろ」

頷く誠臣。誠臣をしげしげと見る朋美。

朋美「ははあん、そっか、そっか」

誠臣「え？」

ニヤニヤ笑って誠臣を見る朋美。

朋美「なんぼ朝や言うても、この暑さやからなあ。涼香は手術終わるまでは、グラゴルしばらくお休みや」

誠臣「え、手術？」

朋美、深刻な顔つきになり。

朋美「うん、来週。ちよつとややこしいらしい。けっこうな大手術になるって、本人言うてた」

誠臣「けっこうな大手術、そんな……」

朋美「嘘じゃボケー！」

大笑いをする朋美。

誠臣「え、え？」

朋美「手術するのはほんま。ペースメーカーの耐用年数来たからその入れ替え手術。局所麻酔の一時間くらいで済む簡単なもんや」

微笑んでいる朋美をじっと見つめている誠臣。やがて脱力。

誠臣「冗談キツイわ、秋村さん」

朋美「あはは。ごめんごめん。医者娘が言

う冗談やなかったな。ほんまごめん」

誠臣「ほんまやで」

朋美「けどまあ、今ので宗次君の涼香への熱い思いはよう分かったわ」

誠臣「……」

朋美「涼香いてへんで心配やったんや」

コクンと頷く誠臣。

朋美「朝からこの暑さやし、簡単や言うても手術前やしな。なあ宗次君、涼香の障碍の等級は知ってる？」

誠臣「ペースメーカー入れてる人は一種。等級は四級に分かれてる。十八歳までに入れた人は、一種一級」

頷く朋美。

朋美「さすがによう調べてる。愛の力やなあ」

立ち上がる朋美。

朋美「さてさて、体もほぐれたことやし、帰ってせつせとお勉強や。そや、宗次君、お昼は涼香のご飯にしよか」

誠臣「え、朝本さんのご飯？」

朋美「グラゴルは休んでるけど、店の手伝いはやってるで涼香。莉緒と約束してるんよ。

食べたない？ 涼香の作ったお昼定食」

誠臣、朋美をじっと見つめる。

朋美「食べたあなかつたら別にええけど」

誠臣「——行くわ」

朋美「よし。そしたら十二時半にへみつぎ」。

今日のメニューはなんやろなあ。ウーイェ

イ！」

誠臣「秋村さん、変わったなあ」

朋美「そう？ 気のせいちゃう」

首を横に振る誠臣。笑う朋美。

○へみつぎ〓店内

テーブル席に座っている朋美、莉緒。

向かい合って誠臣。朋美と莉緒、旨そ

うにトンカツ定食を食べている。誠臣

は、どこか居心地悪そうに。その様子

を厨房から見ている涼香。

涼香「朋美」

朋美「はい」

涼香「もう一回訊く。本日のゲストの来店理

由は？」

動きが止まる誠臣。

朋美「そやからそれは本人から訊いたらええ

って言うてるやん。なあ、莉緒」

莉緒「うん」

無言で食事を続ける誠臣。

○前同・店前

向かい合っている涼香と、朋美、莉緒、

誠臣。

朋美「あー、おいしかった。なあ、宗次君」

誠臣「え？」

莉緒「おいしいなかったん？ 涼香のトンカ

ツ定食」

誠臣「いや、おいしかった。ほんまにおいし

かった。あんなん作れるやなんて、すごい。

朝本さんはほんまにすごいって思う」

涼香「――ありがとう」

ニヤニヤ笑って涼香を見ている朋美

と莉緒。

誠臣「あの、朝本さん。一週間後に手術なんやっつて？」

涼香「え？」

朋美を見る涼香。少し笑む朋美。

涼香「手術言うたかて、ペースメーカー入れ替えるだけや。一時間ほどで終わるって、

主治医の先生言うてたわ」

朋美「わたしら向こうにいつてよか。なあ、

莉緒」

微笑み頷く莉緒。

涼香「ちよつと、なにを言うてるんよ」

朋美「気いつかっているのが分からんかなあ」

莉緒「ほんまに」

誠臣「いや、あの、ぼく、もう帰るし――あの、朝本さん、手術、たいへんや思うけど、なんていうか、気いつけて」

涼香「そやから簡単なもんやっつて言うてるや

ん。それにな、氣いつける言うたかて、わたしがなにを氣いつけるんよ。手術するのはお医者さんや。わたしは一時間ほど寝っ転がってるだけや。あんまりたいそうに言わんといてくれる」

誠臣「う、うん、そやんな。ごめん」

朋美「あーあ、ひどい言われよう。かわいそう、宗次君」

莉緒「ほんまに」

キツと二人を見る涼香。笑みを浮かべて涼香を見る朋美と莉緒。

○へみつき〓店内（夜）

田本や赤塚らを前に松原のぶえの『女の出船』を弾き語りしている涼香。

涼香「『へ♪〓サヨナラ サヨナラ 女の出船』」

唄い終えた涼香に拍手が湧く。礼をする涼香。

涼香「はいー、他にリクエストはございません

んかあ。しばらくはこの美声ともお別れや  
でえ」

赤塚「そやなあ、そう思うたらなんか寂しい  
なあ。氣いつけてな、涼香ちゃん」

涼香「またそれか」

赤塚「え、『また』って?」

涼香「そやからな、どないしてわたしが氣い  
つけたらええんよ。手術するのはお医者さ  
ん。わたしは台の上で横になってるだけ。

氣いつけるんはお医者さんであって、わた  
しやない。そやろ」

美月「これ涼香。なにを偉そうに言うてるん  
よ。赤塚さんあんたのこと心配してくれて  
るんやないの」

厨房から涼香を叱る美月。

涼香「そやけど、ほんまのことやんかあ」

赤塚「そやな、涼香ちゃんの言うとおoryや。

氣いつけるんはお医者さんやわな」

涼香「な、そやろお」

田本「『また』って誰かに同じこと言われた

んか、涼香ちゃん」

涼香「え——うん、いっしょのクラスの男子」

田本「ほ、いっしょのクラスの」

涼香「うん。ちょっと前に朋美と莉緒といっしょになんでか昼定食べに来て、そのとき言われた」

田本「ほお、ほほお」

涼香「なによ、変な笑い方して」

赤塚「そっかあ、涼香ちゃんがなあ」

涼香「赤塚さんまでなにい」

カウンター席に座っている他の三人の客もニヤニヤ笑っている。

赤塚「へ♪」『好きだよと言えずに初恋は

振り子細工の心』

村下孝蔵の『初恋』を口ずさみ始める

赤塚。

赤塚「へ♪」『放課後の校庭を走る君がいた  
遠くでぼくはいつでも 君を眺めてた』  
か」

涼香「言うたらなんやけど、放課後の校庭、  
走ったことなんか、ありませんけど」

涼香を見つめる客たち。美月も。

田本「それはな、文学的比喻ってやつや、涼  
香ちゃん」

涼香「なんのこっちゃ」

赤塚「なあ、涼香ちゃん村下孝蔵の『初恋』  
唄ってやあ。久々に聴きたいなあ。今の涼  
香ちゃんから聴きたいなあ」

赤塚をじつと見る涼香。

涼香「ほんまに。しゃあないオッサンらや  
で」

ギターを構え直す涼香。

涼香「へ♪」『五月雨は緑色 悲しくさせた  
よ 一人の午後は——』

『初恋』を唄い始める涼香を美月が優  
し気な顔で見ている。

○へみつき〳〵店内

仕込みをしている美月。発泡スチロー

ルの箱を抱えて入ってくる雅道。

雅道「まいど、東浦です」

美月「おはようさん。今日は？」

雅道「チヌのええ型のが。珍しいんで持って  
きました」

スチロールの箱を開ける雅道。

美月「うわあ、ほんまやなあ。けど、チヌつ  
てクセない？」

雅道「まあ、真鯛に比べたらちよつとは。け  
ど、湯引きしたり、カルパツチョとかにし  
たら、全然。酒蒸ししてタルタルソースか  
けてもおいしいです」

美月「そっか。やってみるわ。涼香いてたら  
喜んでるやろなあ」

雅道「入院、今日からですか」

美月「うん、明後日手術。さつき病院送って  
いったところ」

雅道「そうですか」

スチロールの蓋を閉める雅道。伝票の  
乗った箱を美月に渡す雅道。

雅道「おおきに、ありがとうございます」

店を出る雅道。

○山ヶ崎総合病院・外景

○前同・三階エレベーター前の廊下

看護師に付き添われ、手術着に着替え  
て立っている涼香。その横に美月。朋

美と莉緒が二人の前に立っている。

十メートルほど離れたトイレ前に立つ  
ている誠臣。

涼香「ほな、入れ替えしてくるわ」

朋美「テレビのリモコンの電池交換みたいに

言うな」

涼香「似たようなもんやろ」

莉緒「いや、違うし」

美月「ほんまにこの子は。朋美ちゃんも莉緒  
ちゃんも、あんたのこと心配してくれてる  
んやないの」

涼香「へえへえ」

朋美、誠臣を見て。

朋美「宗次くん、なんか涼香に言うことないのーん」

誠臣「あ、いや、あの……」

朋美、涼香を見て。

朋美「なんぼ涼香でも、今日宗次君がここに来たわけは分かるよなあ」

誠臣を見る涼香。うつむく誠臣。

看護師「じゃあ、そろそろ行きましょか、朝本さん。ご親族の方は手術中は待機室でお待ちいただけますか」

美月「はい。そしたら行こか、涼香」

涼香「うん。ほな、また一時間後な」

朋美・莉緒「うん」

軽く手を振りあう三人。その様子を見ている誠臣。

看護師といっしょにエレベーターに乗り込む涼香と美月。ドアが閉まる。

○前同・エレベーターの中

並んで立っている涼香と美月。涼香、  
左胸に手を当てて、小声で。

涼香「おん、かかか、びさんまえい、そわか。  
おん、かかか、びさんまえい、そわか」

美月、涼香を後ろから抱きしめ。

美月「おん、かかか、びさんまえい、そわか。

おん、かかか、びさんまえい、そわか——

大丈夫や、単坂のお地藏さんが守ってくれ  
る。簡単な手術や」

小さく頷く涼香。

涼香・美月「おん、かかか、びさんまえい、

そわか。おん、かかか、びさんまえい、そ  
か……」

地藏真言を小声で唱える二人を不思議  
気に見る看護師。

○前同・三階・食堂談話室

テーブルが十席置かれ、給湯器と炊事  
場がある食堂談話室。テーブル席の椅  
子に向かい合って座っている朋美と莉

緒。窓辺に立ち、外を見ている誠臣。

朋美「宗次君、こっち来て座りいや」

振り向く誠臣。

誠臣「え、うん」

歩いて来、莉緒の隣に座る誠臣。

莉緒「心配？ 涼香の事」

朋美「心配やから、ここにいてるんやもん、

なあ」

誠臣「いや、あれからいろいろ調べたら、そ

んなに難しい手術やないみたいやし、そん

なには心配してへん」

莉緒「なあ、宗次君は涼香のどんなどころが

好きなん？」

誠臣「え？」

朋美「また直球やなあ」

莉緒「好きなんやろ、涼香のこと」

小さく頷く誠臣。

誠臣「なんでやろな——朝本さん、やっぱり

すごい明るいし、それでかな」

莉緒「明るいから？」

誠臣「うん。朝本さん、小さいときにご両親  
亡くしてるやろ」

朋美「うん、交通事故。おじさんもいっしょ  
に。親戚のお葬式の帰りやってんて。スマ  
ホ見ながら運転してたアホの車にぶつけれ  
れたんや。ニュースにもなった」

誠臣「そんでな、生まれつき心臓悪いやろ。  
体育の授業もずっと見学やし。そんなん普  
通やったら暗くなるやろ、すねるやろ。思  
わへん？ ぼくやったらそうや。なんで自  
分だけこんなんやって、運命恨む。け  
ど、朝本さんはそんなこと全然ない。いや、  
もしかしてあるんかもしれんけど、けど、  
そんなとこ人には絶対見せへん。けど、ぼ  
くなんか両親もいてて、病気でもないのに  
暗い——ぼくなんかみたいな、勉強も運動  
もあかんただの陰キヤが、朝本さんみたい  
な人、好きになったらあかんって分かって  
る。よう分かってるんや……」

俯く誠臣をしばらく無言で見つめてい

る朋美と莉緒。

朋美「宗次君、顔上げえや」

顔を上げる誠臣。

朋美「ようもまあ、しょうもないことをペラペラペラペラ。宗次君、あんたしょうもないで。果てしなくしょうもない」

莉緒「うん、わたしもそう思う」

誠臣、うなだれて。

誠臣「そうやんな、ぼくなんかほんまにしょうもないよな」

勢いよく立ち上がる朋美と莉緒。

朋美「そういうところがしょうもないって言うてんの！」

莉緒「ほんまや！ 『ぼくなんか、ぼくなんか』ばっかり言うて！ そんな涼香はいちばん嫌いやわ！ そんなん言うてたら口もきいてもらわれへんわ！」

朋美「人が人好きになるのに陰キヤも陽キヤもあるかいな！ 大嫌いやわたしそんな言葉！」

興奮状態の二人を呆然と見る誠臣。莉

緒、少し落ち着き。

莉緒「宗次君、涼香の笑ってる顔、どう思

う？」

誠臣「え」

莉緒「素直な気持ち言うてみて」

誠臣「——すごいかわいい。見るだけでこ

つちも明るい気持ちになる。おおげさかも

しれんけど、生きててよかったみたいなき

持ちになる」

朋美「そしたら、その気持ちに素直になった

らええだけのことやんか、ほんまに」

二人、椅子に座る。

誠臣「うん、そやんな」

朋美「世話の焼けるやつ、二号目や」

莉緒「え？」

フフツと笑う朋美。

○前同・三階廊下・エレベーター前

立っている朋美、莉緒、誠臣。エレベ

「ターが止まり、扉が開く。看護師の  
押す車いすに乗った涼香が、美月とと  
もに出てくる。」

涼香「ただいま」

朋美・莉緒「おかえり」

涼香「あー、おなかへった。朋美、売店行っ  
ておにぎりかサンドイッチ買ってきて。ウ

ーロン茶も」

朋美「いきなりかいな」

美月「手術室出てからこればかり。ほんま  
にこの子は」

涼香「そやかて朝からなんにも食べてないん  
やもん」

看護師「あと一時間くらいしたら食事が出る  
から、少し待っててね」

莉緒「手術終わって、そんなすぐに食べられ  
るんですか」

看護師「はい、大丈夫ですよ」

朋美「循環器系と消化器系は別物なんやなあ。  
勉強になったわ」

涙を拭っている誠臣を見る涼香。

莉緒「宗次君、いちばん心配してくれてたんやから」

朋美「ほんまやで」

誠臣「そんな、そんな心配してへんよ。…」

誠臣をじっと見つめる涼香。

○前同・302号室

四人部屋。ベッドの背もたれを立てて半身を起こしている涼香。ベッド脇の椅子に座っている誠臣。二人、無言。

○前同・三階・食堂談話室

テーブル席に座っている朋美、莉緒、美月。おにぎりを食べている朋美と莉緒。それを見ている美月。

朋美「あー、なんかこっちもお腹すいたわ」  
莉緒「ほんまに」

美月「ありがとうね、二人とも」

莉緒「いえ、そんな」

美月「帰る前に、涼香に顔見せてやってね」

朋美「はい、もちろんです。けど今はちよっ

とラブラブタイムなもんで。なあ、莉緒」

莉緒「いや、『ラブラブタイム』って」

笑いあう二人を微笑んで見ている美月。

○前同・302号室

涼香「心配して、わざわざ来てくれて、ありがとう」

誠臣「え」

涼香「そやから、ありがとうって」

誠臣「あ、うん。けど、逆に迷惑やなかったかなって」

涼香「来てくれたわけくらい、分かってる」

誠臣「朝本さん、あんな、ぼくは」

涼香「うん」

誠臣「ぼくはな」

涼香「うん」

誠臣「ぼくは朝本さんのことが好きや」

涼香「うん」

誠臣「どんなほくでも、ほくがどんなでも、  
気持ちだけは、ちゃんと伝えなあかんおっ  
て思っつて」

しばらく無言でいる涼香。

涼香「朋美と莉緒にお尻叩かれたんやろ」

誠臣「え」

涼香「まあ、なんというか、嬉しくもある」

誠臣「え、え、そうなん？」

涼香「そんでな、あんたわたしとつきあいた  
いとか、思っつてるわけ？」

誠臣「え、それは、まだ、そんなん、考えた  
ことなかったし」

涼香「うん。わたしもつきあうとか、よう分  
からん。自分のこの体とつきあうのんで、  
精一杯やったからな。たぶんこれからもそ  
うなんやろな」

誠臣「朝本さん」

涼香「まあな、そやから、いちばん近いとこ  
ろにいてる男友達いうことにしてくれたら、

今のところはありがたい」

誠臣「うん、それでええよ」

窓の外に顔を向ける涼香。ベランダに張られた緑色のネットを見る。

涼香「宗次君、このネット、なんで張ってあるか、分かる？」

誠臣「え——それは、鳥が入って来んようにするため、とか」

涼香「それもあるやろな。けどほんまの理由

はな、入院患者の飛び降り防止や」

誠臣「飛び降り防止」

頷く涼香。

涼香「四年前やったかな、五階のベランダから飛び降り自殺した人がいてるんや。わたし、その日定期健診の日やってな。えらい騒ぎになったわ」

誠臣「そうなんか」

涼香「自殺とかやあ。ほんま、自殺とか、なんなんや……」

窓外を見ている涼香の横顔をじっと見

つめている誠臣。

○秋村家・朋美の部屋（夜）

数学の問題集を開き、解いている朋美。

真剣な顔つきの彼女を、黙って見ている織枝。

×

×

×

休憩し、焼売を食べている二人。

朋美「涼香、ほんまに腕上げたなあ。中華料

理にはまりまくってるだけのことあるわ」

織枝「うん。今日のチンジャオロース定食な

んか絶品やったで。そんで朋美ちゃんは顔

つきが変わった」

朋美「え」

織枝「医学部目指す事に、腹くくった顔に見

えるんやけど、外れてる?」

首を横に振る朋美。

朋美「当たり前です。涼香の手術終わった後の

宗次君が泣いてるの見て、なんというか」

織枝「なんというか?」

朋美「医者は、患者さんのためだけじゃなく  
って、待ってる人のためにも治療や手術す  
るんやなって。それが分かったっていう  
か」

織枝「それが、朋美ちゃんのきっかけ？」

朋美「おかしいですか」

首を横に振る織枝。

織枝「そんで、涼香ちゃんと宗次君は付き合  
うことになったん？」

朋美「いやあ、あれどうなんやろ。つきあっ  
てるって言うんかなあ」

●インサート・山ヶ崎中央公園・グラウン

ドゴルフ場

ベンチに座っている涼香と朋美。ラス

トショットを大きく外す誠臣。

涼香「下手くそが！」

誠臣「ごめん……」

涼香「そやから謝らへんでもええし！」

朋美「見てて面白い、あの二人」

織枝「そっか。けど来月から予備校通い始め

たら、グラウンドゴルフもあんまりできん  
よくなるなあ」

朋美「そうですね——でも、あそこはもう、  
わたしとしては卒業かなあ」

朋美、焼売をパクツと口にして、咀嚼  
しながら。

朋美「涼香と宗次君、ずっと続いていたら  
ええのになあ」

微笑み、頷く織枝。

○山ヶ崎高校・体育館

女子バレー部が練習をしている。紅白  
戦の最中。芽衣紗が強烈なスパイクを  
放つ。レシーバーが大きく弾いたボー  
ルを、瞬時に駆け出し身を投げ出して  
拾い上げる莉緒。

○帰り道

並んで帰っている莉緒と芽衣紗。二人、  
しばらく無言で歩いている。

芽衣紗「まさか一回戦で当たるとはなあ」

莉緒「うん」

芽衣紗「けど、楽しみやな」

莉緒「うん」

芽衣紗「なあ、莉緒」

莉緒「なに」

芽衣紗「うちに入ってくれてありがとうな」

莉緒「なによ今更」

芽衣紗「そこはちゃんと『こつちこそいれて

くれてありがとう』とか言えよ」

笑う二人。

莉緒「涼香と朋美のおかげや。あの二人と仲

よくなってへんかったら、今頃わたし――

――

芽衣紗「朝本さん、キャプテンの店によう食

べに行ってるみたいやで。『なんかいつの

間にかお父ちゃんとすごい仲良うなって

る』って言うてたわ」

莉緒「涼香らしいなあ。あんな、わたしな」

芽衣紗「うん」

莉緒「涼香や朋美のためにも西邦に勝ちたいんや。誰かのために勝ちたいなんて思ったことなんか、初めてや」

しばらく無言で歩いている芽衣紗。

芽衣紗「ちよつとクサイけど、まあ許したる」

莉緒「うるさいわ」

笑いながら帰っていく二人。

### ○市立体育館・外景

#### ○前同・館内

コート上、ウォーミングアップをしている山ヶ崎高校と西邦学院の女子バレー部員たち。西邦の部員たちが、莉緒をチラチラと見ている。

半分ほどの入りの二階観客席。前方の席に並んで座っている涼香、朋美、誠臣。

涼香「朋美はもちろん西邦の応援するんやん

なあ」

朋美「そうそう、そら当然自分の学校の応援するのに決まってますやん。ゴーゴー西邦、

イケイケ西邦——ってなんでやねーん」

涼香「——あんたな、医者になっても、患者

さんにノリツツコミとかしたらあかんで」

朋美「あかんかあ、やっぱり」

涼香「あかんに決まってるやろ！」

涼香、コートに目を向けて。

涼香「西邦見てみ」

朋美「うん、明らかに莉緒意識してる」

涼香「莉緒が山高でバレーやってること、言

うてへんかったんや」

朋美「うん、そんな仲ええ子いてへんしな。

あっちではあんまり誰とも口きかへん。学

年トップのテングって思われてるんちゃう、

知らんけど」

涼香「莉緒は、いつもどおりみたいやな」

朋美「うん。けどやっぱり、ユニフォーム姿

がよう似合うな、莉緒は」

頷く涼香。

三人の少し後方の席に、ひとり座って  
いる岡島。

×

×

×

山ヶ崎高校対西邦学院の試合が始まる。  
莉緒、西邦のアタッカーが放つスパイクを正確にレシーブし、セッターに返す。レシーバーが弾いたボールに体を投げ出し、何度も拾い上げる。生き生きとした莉緒のプレーがチームに勢いを与えていく。

豪快にスパイクを決めた芽衣紗と笑顔でハイタッチを交わす莉緒。

涼香「莉緒、ええよー！」

朋美「莉緒、サイコー！」

誠臣「松永さん、頑張れー！」

声が莉緒に届く。三人を見上げる莉緒。  
笑顔で頷く。

芽衣紗の絶妙なフェイントが決まり、

山ヶ崎高校、第一セットを先取。

岡島が、チームメイトと喜びあう莉緒をじっと見ている。

× × ×

コートチェンジしての第二セット。山ヶ崎が優勢。堅実なプレーを続けている莉緒。芽衣紗のスパイクが決まり、西邦の監督がタイムアウトを求め、ベンチに戻る両チーム。

立ち上がる岡島。

岡島「みなさーん、山ヶ崎のリベロ、松永莉緒ちゃんはセックス込みのパパ活女ですよー！」

叫ぶ岡島。驚き、振り返る涼香、朋美、誠臣。

岡島「相手はワタクシですよ。本人が言うてるんだから間違いないですよ。おかげで市役所解雇されちゃいましたよ。でも莉緒ちゃんは何んのお咎めなしで、転校してバレー続けてまーす。これって変だと思いませんかーっ！」

体育館に響くその声。凝った顔の莉緒。  
立ち上がる誠臣。岡島のところへ駆け  
ていき。

誠臣「こら、こらお前」

岡島の襟首を掴む誠臣。

岡島「お、お、ご友人がやってきましたよ莉  
緒ちゃん。それとも今度はこの彼と若々  
しいセックス楽しんでるのかなあ！」

誠臣「おまえ、ええかげんにせえよ！」

岡島「ガキが黙っとけや！」

激しい肘打ちを誠臣の鼻に当てる岡島。

誠臣「ぐっうう！」

ボタボタこぼれ出す鼻血。うづくまる

誠臣を薄笑い浮かべて見下ろす岡島。

岡島「そうそう、ボクもそんなふうにな鼻血が  
タボタ出ちゃってねえ」

涼香「宗次君！」

駆け寄る涼香と朋美。係員三人が走っ  
てやってくる。岡島を取り押さえる係  
員たち。

岡島「なんや、おまえら！ オレだけクビで、

あの女はバレエ続けとってよ！ 放せや！

おい、ヤリマン女！ なにシレッツとバレエ

続けてるんや、おお！」

係員二人に引きずられるようにして、

その場から去っていく岡島。

涼香「宗次君」

誠臣「大丈夫、やと思う」

手で鼻を抑えている誠臣。指の間から

鼻血がこぼれ落ち続けている。

係員「今日、お医者さん来てるから、診ても

らいましょう」

誠臣「はい」

立ち上がる誠臣。涼香と朋美を見て。

誠臣「行ってくるわ。松永さん、思い切り応

援したげて」

涼香「うん、分かった」

係員に付き添われ、その場を離れる誠

臣。

試合が再開される。莉緒の顔に浮かぶ

動揺。幾度かのラリーの後、相手のスパイクを大きく弾く莉緒。

涼香「莉緒、大丈夫！」

朋美「がんばれ、莉緒！」

莉緒を狙ってスパイクを放ち出す、西邦の攻撃陣。ミスを繰り返す莉緒。交代が告げられ、替わって茉祐がりべロとしてコートに入る。ベンチに座る莉緒。俯き顔を覆って泣き始める。

攻勢を続ける西邦、逆転する。ずっと泣いたままにいる莉緒。

朋美「莉緒……」

莉緒をじっと見つめている涼香。立ち上がる。手すりを強く握る。

涼香「莉緒！ 歌できた！ できたんや！  
今から唄うからな！ 聴いてや！」

深呼吸する涼香。唄いだす。

涼香「へ♪」

胸ぐらの ど真ん中

空いたがらんだうの でかい穴

びょうびょうと風 吹き抜けて  
うるさいんやよ

恥ずかしいわ ここまでが

情けないわ 冷や飯のお茶漬けが

傷ついて 傷つけて

泣いて歩いていく いつもの道

知らんぷりで人 行き過ぎて

寂しいんやよ

恨めしいわ あの野郎が

悔しいわ 生き様晒し往くのが

せやから真昼 忌まわしいわ

せやから夕暮れ 憎らしいわ

けども明けりや朝陽 押すやん風が  
背中いっぱいを 願ってもないのに

明日が昨日でも 昨日が明日でも

涙ちぎって 今日を往く

明日が昨日でも 昨日が明日でも

涙ちぎって 今日を往け

願ってもないけど 願ってもないけど

——負けるんか莉緒！ あんたはこのまま  
デタラメ言われたまま負けてしまっ  
か！」

朋美も涼香のそばに立つ。

朋美「莉緒！ 聴いたやろ今の涼香の歌、聴  
いたんやろ！ そこでじつとそないしたま  
までいてるんか！」

二人をじつと見ている莉緒。頷き、監  
督の梓のところへ行く。頷く梓。西邦  
にポイントが入る。交代を告げる梓。  
茉祐とハイタッチを交わし、コートに  
入る莉緒。強く涙を拭う。

莉緒「さあ来い、打って来い！」

構えを取り、叫ぶ莉緒。

西邦のジャンピングサーブ。レシーバーが弾く。身を投げ出しボールに飛びつき、拾い上げる莉緒。大きく弧を描いたボールが芽衣紗の待つところへ。

芽衣紗「おりゃあ！」

強烈なスパイクを決める芽衣紗。チムメイトとハイタツチを交わす莉緒。ピンチサーバーと交替で一旦コートから出る莉緒。ベンチに戻った莉緒の肩を強く掴む茉祐。

茉祐「莉緒、もうわたしコート入らへんからな！ このままあんたで勝つよ、西邦に！」

莉緒「はい！」

強く頷く莉緒。席に戻る涼香と朋美。

涼香「世話の焼ける子や、最初から最後まで」

朋美「ほんまになあ」

山ヶ崎の攻勢が始まる試合を微笑みながら見続ける二人。

○すずらん通り商店街

並んで歩いている涼香、朋美、莉緒。

涼香「西邦に勝っても次で負けたらなあ」

朋美「ほんまに」

莉緒「もう、分かったって。しゃあないやん。

優勝した播大付属と当たったんやから」

涼香「そういうの言い訳と言う」

朋美「うんうん」

莉緒「るっさいなあ。けどチーム力はまだまだ

だ上がる。次やったら絶対負けへん」

朋美「へえへえ、ありがたく聞いておきま  
す」

莉緒「けど、ありがとう」

涼香「ん？」

莉緒「歌、ありがとう」

しばらく無言で歩いている三人。

莉緒「宗次君、大丈夫やったかな」

涼香「さっきラインあって、たいしたことな

いって。鼻の骨とか折れてないらしいわ」

莉緒「そっか、よかった」

朋美「けど、かつこよかったやん、宗次君」

答えない涼香。

朋美「かつこええって思わへんかったんか」

涼香「それは、まあ、ちよつとは」

朋美「んははは」

涼香「変な笑い方すんな」

莉緒「今度いっしょに映画観に行くんやろ」

涼香「――まあ、そやけど」

朋美「今夜はそのへんのこと、ゆっくり聞か

せてもらいましょか。なあ、莉緒」

莉緒「うん、楽しみや」

涼香「べつに話すことなんか、なんもない

わ

朋美「おっとまり、おっとまり、ウーイェ

イー！」

肩を並べ、楽し気に歩いていく三人。

(F・O)

○単坂叶え地蔵・地蔵堂（早朝）

〈TⅡ二年後〉

十九歳になった涼香が地蔵尊に手を合  
わせ、頭を深く垂れている。

後ろからやつてくる絹枝。涼香の横に  
立つ。

涼香・絹江「おん、かかか、びさんまえい、  
そわか。おん、かかか、びさんまえい、そ  
わか。おん、かかか、びさんまえい、そわ  
か……」

地蔵真言を唱え続ける二人。

×

×

×

地蔵堂に設えられたベンチに座ってい  
る涼香と絹江。

絹枝「悔しいか」

涼香「なにがよ」

絹枝「あの二人から、もうロクに連絡ないん  
やろが」

涼香「ああ。そんなんしゃあないわ。二人と

も忙しい学生生活送ってるんや」

絹枝「今の時代や。簡単に連絡取れるやろ」

涼香、薄笑み浮かべて。

涼香「二年も経ったんや。朋美はお医者さん、

莉緒はバレーの選手。未来に向かって進んでるんや。いっしょの場所で止まってるだけの人間から連絡きたかて、鬱陶しいだけや」

携帯灰皿を出し、煙草に火を付ける絹

江。

涼香「お地藏さんの前で煙草吸いなや」

絹枝「おまえは止まってるだけなんか」

涼香「二人——いや、三人ともそう思ってるやろ。しかしまあ早かったなあ、あいつ。大  
学行って彼女作んの」

薄笑み浮かべる涼香。

絹枝「いっちょ前に不貞腐れよってから、ほ  
れ、今日は仕入れで仕事終わりのダーリン  
が来たぞ」

地藏堂脇の道に停まるへ東浦鮮魚店へ

の軽トラック。

涼香「ダーリンとか、笑かしな」

絹枝「車、持っとるんやろが。なんじゃあれ」

涼香「車検なんや。乗ったことない車乗るのが嫌なんやつて。けっこう神経質なんよ」

運転席から降りてくる雅道。地藏尊の前に立ち、手を合わせ、頭を垂れる。

涼香と絹江の前に立つ。絹江に会釈する雅道。

立ち上がる涼香。雅道と肩並べて歩き始める。

絹江「涼香よ」

振り返える涼香。見つめあう二人。頷

く絹江。薄く笑い、頷き返す涼香。

涼香「明日も生きとけよ、オババ」

絹枝「おまえもじゃ、クソガキ」

軽トラックに乗り込む二人。

○軽トラック車内

運転している雅道。助手席の涼香。二

人、しばらく無言。

涼香「昨日な」

雅道「ん？」

涼香「初めてオナった」

雅道「……」

涼香「イクって、あんな感じなんやな」

雅道「大丈夫やったんか」

涼香「やってるときも、終わった後も、心拍

上がってるのん、分かったけどな——今、

生きてるしな、大丈夫なんちゃう、知らん

けど」

雅道「『知らんけど』ってよ」

涼香「あいつと初めてキスしたときよりはド

キドキせえへんかったわ」

ふふっと笑う涼香。

涼香「妬いてる？」

雅道「アホか」

涼香「約束どおり海、行ってからラブホな」

小さく頷く雅道。

涼香「なあ、わたしの裸見たい？」

また小さく頷く雅道。

涼香「手術の跡、思ってるよりいかついで」

雅道「関係あるか、そんなん」

涼香「そっか。それやったら、体、いっぱい触ってほしい。それで、いっぱいイカせてほしい」

頷く雅道。

涼香「けどな、挿れるのはちょっと待ってほ

しいんや」

雅道「それが一生でも、かまへん」

涼香を見ない雅道。運転を続ける。

○単坂叶え地蔵・地蔵堂

ベンチに坐っている絹江。立ち上がる。

また地蔵尊の前に立つ。頭を深く下げる。

絹枝「お地蔵さん、どうかあの子をこれからも、これからも、不憫な子やから……」

肩が震えているその後ろ姿。

○道

走り続けているへ東浦鮮魚店への軽トラック。助手席の窓が開く。海が見えてくる。顔を出す涼香。

涼香「おん、かかか、びさんまえい、そわかあ！」

叫ぶ涼香。スピードが上がる軽トラック。海へと進み続ける。

(了)